

令和2年産米の成分・品質調査結果(コシヒカリ)のお知らせ

令和2年産米の成分調査が終了しました。

出荷された玄米および粳からサンプルを採取し、当JA所有の機器で調査し得られた結果です。2年産は、7月の日照不足・多雨の影響による茎質低下や、8月～9月上旬の高温で後期栄養不足となり、品質低下となりました。土づくりや後期栄養の確保、水管理など基本技術の励行が、品質安定につながります。

**3年産も引続き基本技術を徹底し、
良食味・高品質米の生産を目指しましょう。**

食味値はスコア、その他は%

地区別	総サンプル数	水分	成分調査				品質調査					
			タンパク	アミロース	脂肪酸度	食味値	良質粒	未熟粒	被害粒	死米	着色粒	胴割
城川	886	14.7	5.7	16.9	17.9	80	63.6	31.3	4.7	3.1	0.3	0.2
千田	493	14.8	5.6	16.8	17.1	81	61.8	31.9	5.9	3.9	0.3	0.2
小栗田	678	14.9	5.7	16.9	17.5	80	63.0	31.2	5.5	3.7	0.3	0.1
南部	161	14.9	5.4	17.3	18.7	82	65.6	29.5	4.7	3.0	0.5	0.2
川井	136	14.8	5.4	16.9	18.3	83	65.3	29.5	5.2	3.4	0.4	0.2
真人	235	14.9	5.3	17.3	18.6	82	64.4	29.2	6.0	3.9	0.5	0.2
東小千谷	223	14.9	5.6	16.7	18.1	81	63.4	31.8	4.3	2.7	0.4	0.2
四ツ子	539	14.9	5.5	17.2	18.6	81	67.4	28.6	3.3	2.3	0.5	0.1
中央	292	14.8	5.5	17.0	18.2	82	65.3	29.7	4.4	3.2	0.4	0.2
山新田	138	15.1	5.6	17.6	18.8	80	68.5	28.0	2.8	1.8	0.4	0.2
片貝中央	722	14.5	5.4	16.9	17.9	81	61.7	34.5	3.3	2.3	0.3	0.1
鴻巣	90	14.5	5.5	16.9	17.7	81	61.3	33.6	4.6	3.3	0.3	0.1
高梨	635	14.4	5.2	16.9	17.4	84	57.1	38.3	4.2	2.8	0.3	0.2
計・平均	5,228	14.8	5.5	17.0	17.9	81	64.6	30.5	4.5	3.0	0.4	0.2
令和元年産米 平均値		14.6	5.7	15.4	15.8	83	51.8	34.9	12.3	0.8	0.3	10.8
目標値		15.0	5.3 ~5.7	20.0 以下	18.0 以下	80 以上	80 以上	少ないほど良い				

※測定は静岡製機の食味分析計(TM-3500)を使用。

食味値：タンパクは水分15.0%時の推定値で、タンパク含量は、米の食味を左右する最大条件となっております。また、地区により差はありますが、全体平均値は目標値内となっております。

稲作情報



異常気象に備えた丈夫な稲づくり
「土づくり」「適切な水管理」などの基本技術の励行を

作柄概況107

令和2年産米の作柄は魚沼で107（良）でしたが、管内の米の品質状況では、一等米比率は全品種で71・8%、コシヒカリで71・9%となりました。品質低下の主な要因としては、田植え後から初期生育全般において順調に推移しましたが、7月の日照不足・多雨の影響による茎質低下と8月～9月上旬の高温による後期栄養不足、また、8月24日の局地的強雨の倒伏多発による刈遅れによって除く青未熟粒と乳心白粒発生の原因となり、品質低下につながりました。

基本技術の

励行が重要

生育の早い早生品種は、カメムシによる斑点米での格落ちが多くなっています。出穂期が早く、カメムシの防除適期を逃しやすいためと考えられます。被害粒は混入が少量であっても格落ちの要因となります。JAや県などからのカメムシ発生情報を注視し、防除適期を逃さずに、確実に防除を徹底しましょう。また、籾混入による格落ちも見られます。籾の流量を減らすなど、丁寧な調整をお願いします。気象変動に負けない稲づくりには、「土づくり」や「適切な水管理」などの基本技術の励行が最も重要に

稲作情報メール

配信中

JAでは稲作の情報提供を迅速に進めるため、メール配信を行っています。ぜひご利用ください。メール配信のお申込みは、各営農経済センターにて随時受付けています。

なります。

次のページにあげるポイントを確実に実施しましょう。



稲作情報

品質・食味の高位安定化に向けて 次のポイントに注意

ここがポイント

①丁寧な耕うん

しっかりと根を張り、健全な発育を促すため、耕深15cmを目標に耕うん作業を行います。ただし、急激に深くすると初期生育不良を起す場合があるので1年に1〜2cm程度としましょう。

②施肥改善

過剰生育とならないよう基肥量の見直しを行いましょう。穂肥をしっかりと施すことが品質向上につながります。

また基肥一発肥料は地力などに応じて慎重に施肥量を決定する必要があります。

(控えめが基本)

③早目の中干し・溝切り

移植後30日を目安に遅れずに中干しを実施し、生育過剰が予想される場合は早めに中干しを開始するようにしましょう。なお、中干しは遅くとも出穂30日前までには終了するようにし、小ヒビが入る程度での終了を基本としましょう。

溝切りは後の水管理(飽水管理)作業を容易にしますので必ず実施しましょう。

④水管理の徹底

中干し以降は飽水管理を行い、圃場を乾かし過ぎないようにし、特に夏場の高温時には出来るだけ入水しましょう。

完全落水は出穂後25日以降としましょう。

⑤的確な穂肥対応

穂肥は品質や食味・収量に大きく影響しますので、生育状況に応じた対応が必要になります。しっかりと施せるように稲姿を調節することが最大のポイントになります。さらに2回目の穂肥は、登熟期の栄養不足を防ぎ品質向上が期待されますので必ず施しましょう。

なお、基肥一発肥料についても、高温で推移した場合等、状況に応じて穂肥の施用を検討しましょう。

⑥適期刈取り

機械・施設能力に応じた作付や品種の変更、作付時期をずらすなど、刈取り適期の集中や刈り遅れによる品質低下を防止しましょう。

⑦土づくり

気象変動に負けず、高品質・良食味米を生産するためには、有機物や微量要素が多く含まれる豊かな『土』を作る必要があります。単年度では効果が見えづらく労力も掛かりますが、積極的に有機物や土づくり資材を投入し『土』を育てましょう。

⑧安全・安心

使用する農薬・肥料などは、必ず使用方法を確認し安全使用に留意しましょう。種子更新・苗購入先や使用品目名・量などは栽培管理日誌へ正確に記入しましょう。